
僕はヒーロー

広瀬亜紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はヒーロー

【Nコード】

N0442A

【作者名】

広瀬亜紀

【あらすじ】

カップリングめちやくちやのギャグ小説。「アンパンマン」のキャラクターたちをコナン（快斗もいるけど）でやってみました。

(前書き)

アンパンマン 工藤新一

メロンパンナちゃん 毛利蘭

バタコさん 灰原哀

ジャムおじさん 阿笠博士

チーズ 服部平次

バイキンマン 黒羽快斗

子供達(アンパンマンには出ないけど)

歩美、光彦、元太

ある晴れた日。

「チーズ、チーズ、チーズ、チーズ」

「・・・」

「チーズ、チーズ、チーズ、チーズ」

「・・・」

「自分の名前も覚えられない能無し馬鹿犬」

「（ブチッ）犬ちゃうゆーとるやろうが！！」

ある家のある庭で楽しそうに遊んでいるバタコさん（哀）とチーズ（服部）。

「なんでこんな首輪つけるん！？しかも人さらいや！！」

「あなたは捨てられていたのよ？」

「だから寝とったんじゃ、ボケ！！！」

そう。このチーズは最近バタコさんが拾ってきた（？）人間・・・いや犬だった。

「こんな立派な家まで作ってあげたのにどこが不満なの？」

バタコさんが指差すその先には、どう見ても家とはいえない犬小屋が。

「どこもかしこも不満や」

「とにかくあなたは犬なのよ。（断言）ほおら！ボールを取ってきなさい」

チーズの言葉は完全無視でボールを投げるバタコさん。

「あんた絶対、遊んどるやろ」

そこへバタコさん溺愛のアンパンマン（新一）登場。

「あーっ！てめえ！！また俺のバタコさんに近付きやがって！！殺すぞ！」（こら）

「あんた、正義の味方やろ」

「ちよつとアンパンマン。年下には興味ないのよ、何度言ったらわかるの」

「どう考えてもタメや」

「そんな……。ああ！俺はどうしたらいいんだ！！」

今の会話でわかるようにアンパンマンはバタコさんが大好きなのだ。しかし、そのバタコさんは超年上好き。

「男は50過ぎなきゃダメよね」これが口ぐせである。

そして、そんなバタコさんに惚れているアンパンマンは正義の味方なのに悪党に近いくらいの極悪非道。

バイキンマンの立場がなくなってしまうほどである。

「バタコさん！！お家でお茶でも飲みましょう」

「……。しょうがないわね」

そう言うのと2人は家に入っていつてしまった。

「こんな奴らには付き合つてられん。はよ寝よ」

こんなおかしなところに連れられてしまった可哀想なチーズはこの先どうなってしまうのだろうか。

（家の中）

「おお！ちようどよかった！今、お茶を入れたとこなんじゃ」

そう微笑むのは優しく明るいジャムおじさん（博士）。

「なんてことすんだよ！ジジイ！！俺が今やろうと思ったのに！！」

「！」

「……。それは、すまんかったのお」

「チッ！」

舌打ちまでするとは本当にヒーローか？アンパンマン。

「ごめんなさい、ジャムおじさん」

「いいんじゃないよ」

「あーっ！バタコさん、なんでこんなジジイに！」

「だから私は年上好きなよ、あなたなんかよりジャムおじさんの方が好きだわ」

「ええっっ！？」

バタコさんの言葉にショックを受けたアンパンマンは黙り込んでしまった。

『ああー・・・どうして俺はあと40年先に生まれなかったんだ・・・。どうにかして老ける方法はないもんかなあ・・・』

そんなバカなアンパンマンに、とってもバカらしい案が思い浮かんだ。

「いいこと思いついた！」

「どうしたんじゃない？アンパンマン」

「亀を助けに行ってくる！！」

そう言々とアンパンマンは勢いよく家を飛び出していった。手には浦島太郎の本を持って。

「あら？アンパンマンは？」

「亀を助けに行くそうじゃ」

「そう。また何を思いついたのかしら、あのバカは」

そんなアンパンマンはバタコさんにめちゃくちや言われているとも知らずに海へ来ていた。

『チッ！ちようど亀を苛めてるガキなんていねえか・・・』

そう思った矢先に子供達がやってきた。

歩美、元太、光彦である。

「おい、そのガキ」

「あつ！アンパンマン！！」

「亀、苛めてこい」

「くくくくくくくくくく」

突然のありえない発言に3人は同時に固まってしまった。

だが、勇気ある3人はすぐにアンパンマンに反論した。

「どうして亀さんを苛めなきゃいけないの!？」

「可哀想です!!」

「俺達、少年探偵団にはそんなこと出来ねえよ!!」

「亀さんだつて生きてるんだよ!」

「所詮、亀だ」

ヒーローがそこまでキツパリ言うか。

「それにアンパンマンは優しい正義の味方のはずです!!」

「優しいい？正義い？味方あ？」

そう言うアンパンマンには、真っ黒なオーラが漂っていたと言う。

（後日談）

「つたくくくく。こうなつたら自力で竜宮城に辿り着くしかねえな・
・・」

アンパンマンはスタスタとその場を立ち去った。

くその頃のバイキンマンく

「あーあ・・・アンパンマンがあんなんじゃない俺、立場ねえじゃねえ
か」

この物語で唯一悪者のはずのバイキンマン（快斗）がいた。

「つまんねえなー・・・散歩でもしよーかなあ・・・」

そう言うバイキンマンはさっきまでアンパンマンがいた海へ向かった。

「ええーん！（泣）アンパンマンに苛められたあー・・・」

「俺、腹へって動けねえよあー・・・」

「うわっっ！？どうしたんだよ？その３人！」

「バイキンマンー！！」

そう言う３人はバイキンマンに抱きついた。

「アンパンマンが苛めるんだよー！！」

「亀さんを苛めろって言ったのぉ」

「とつても怖かったです」

「はあ??」

バイキンマンは意味がわからなかったが、とりあえず３人を慰めた。そして歩美と光彦にはキャンディを元太にはうな重をあげ、そして去っていった。

「バイキンマンっていい奴だな」

「そうだね」

「善い人街道まっしぐらですね」

そう呟くと３人も家へ帰っていった。

くその頃のアンパンマンく

「くっそ・・・竜宮城ってどこだよ!!」

アンパンマンはまだ竜宮城を見つけれずにいた。

「おい！犬!!」

「なんや！てか犬ちゃう!!」

「んなこたあどうでもいい！それよりお前、竜宮城知らねえ!？」

「は?・・・竜宮城ってあの?」

「そうだ！あの浦島太郎で有名な!!」

「ぶっ!!」

チーズはアンパンマンがあまりにも変なことを真面目に言うので噴き出してしまった。

「なんだよ!？」

「お前、それ本気で言うところなのか？」

「当たり前だ」

「ぶっ!!!ギャハハハハハハ!!!」

「だからなんだよ!？」

「アホや!アホにもほどがある!」

それからチーズは暫く腹を抱えて爆笑していた。

そこへアンパンマンの親友・メロンパンナちゃん（蘭）がやってきた。

「アンパンマン」

「あっ!メロンパンナちゃん!」

「久しぶりね!」

そう言うときメロンパンナちゃんはニツコリと微笑んだ。

「そうだな!とここでさ!竜宮城ってどこにあるか知らない?」

「ぶっ!!」

チーズはまた爆笑し始めた。

「竜宮城?それは海底にあるから行くのは無理よ」

「でも浦島は行けた!」

「ああ知らないの?浦島太郎は半漁人なの」

「「ええっ!」」

これにはチーズも吃驚して笑うのをやめた。

「あそこに行くにはエラないと無理、無理!」

「そうなのか!くっそー!!」

「・・・お前ら、絶っっ対アホやろ」

こうしてアンパンマンは竜宮城行きを諦めた。

「でも、どうして竜宮城なんて行こうと思ったの?」

残念そうにしているアンパンマンにメロンパンナちゃんが聞いた。

「バタコさんは超年上好みなんだよ。だから竜宮城へ行つて玉手箱をもらい、おじいさんになろうと・・・」

「なーんだ！そうだったの！？でもプレゼントの方が効果あると思うわよ！」

「へ？」

「高級品・・・例えば宝石とかをプレゼントするのよ」

「なるほど！ありがとうメロンパンナちゃん！」

何を思ったかアンパンマンは、また走つてどこかへ行つてしまった。

くそしてく

「ギャーーーーーッッ！！！！！」

バイキンマンは悲鳴をあげた。

「おおっ俺の宝が・・・なーーーーーいつっ！！！！！」

そう。なんとアンパンマンがバイキンマンの今まで盗んだ宝物を全て盗んでしまったのだ。

「許さねえっ！どこだアンパンマン！！！」

そう言うバイキンマンは家を飛び出していった。

数日後、戦争が起こったのは言うまでもない。

（後書き）

作者より

どうでしたか？？珠翠月様のお話を読んで私も書いてみたい！と思
ってやってみました。

なんか最後オチとか全然なかった・・・。

やっぱギャグは難しいですね。

こんな作品でも感想いただければ嬉しいです！！
でわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0442a/>

僕はヒーロー

2010年10月17日07時30分発行